

春燈

May 2015

5 月号



主宰の句

安立公彦

これよりは春月なるぞ膨らかに

雁ゆくや千櫓が里の入相に

沖波のいざよふ春の愁ひかな

真砂女忌の友垣つつむ遊糸かな

暮れかぬる真砂女の海や何を呼ぶ



久保田万太郎の句

名月や傳法院の池のぬし

『流寓抄以後』昭和三十八年

前書に「仲秋名月の夜 たましく浅草傳法院にあり」とみるが、私の手許に残っている案内状には「ことしの仲秋名月には久保田先生の御出でを願って月を賞し句をつくりたいと存じます。幹事安住敦。昭和三十七年九月十三日（以下略）」。其夜の月は晴渡り小堀遠州造園の築山の池に耿々と影を落としていた。「池のぬし」の把握は写生に安住しきれない作者の即興的な抒情詩だ。

松橋利雄

久保田万太郎の句

おもふさまふりてあがりし祭かな

『久保田万太郎句集』昭和十一年～十三年

突然の騒雨で祭が中断。雨宿りしつつ昂揚が収まらな
いまま大声が飛び交う。それに被さる雨音。これがもし
劇中であればこの間万太郎師ならほどのような展開と台
詞を設えるであろうか。そう考えると楽しい。

やがて怒号も雨音も鎮まり雨が上がる。夏の雨は江戸
っ子そのものだ。祭再開の青空と喜びの声。祭笛がはず
む。視覚と聴覚が心地よく刺激される句だ。

小泉 三枝

燈下集



○ 宮沢治子

風花や歩み初めたる子の髪に
菜の花の音なく丈の伸びにけり
いぬふぐり踏まれても青尽くしけり
日向ぼこ話のはづむ飴ひとつ
誤作動の非常ベル鳴る建国日

○ 府川昭子

一捌けの雲の雲呼ぶ春隣
仏灯の揺らぎも春の近きかな
香の高き朝の珈琲春立てり
瀬の音に急かされてゐる芽吹かな
湯けむりの雲となりたる芽吹かな

○ 永島雅子

春の灯の揺るる川面や屋形舟
銀の器磨きをりけり春灯下
交番に道尋ぬるや春灯下
地図を手に異郷の街や柳絮飛ぶ
初蝶を児と目で追へり散歩径

○ 片山博介

旧正や商家の軒に鍾馗像
汝は髪を結上げ魚は氷に上る
夫婦して近江の生れ蜆汁
目刺焼けばまなこの穴に立つ焰ラ
亡き母の実印を捺す余寒かな

○ 鈴木撫足

豆を打つ鬼籍に入りしひとを恋ひ

嫉妬てふ心の針を納めけり

焙らるる海苔の薄さや我が身とも

春の園一筋入れし畝の鋤

踏切の棹しならせて春疾風

○ 矢口笑子

一幅の余白ゆたかに囁れり(日本農展三句)

永き日や速水御舟の写生帳

額縁に納まりきれず木の芽立つ

三椏やおしやべり尽きぬ女どち

ちやつかりと飯食うてをり春の猫

○ 都丸美陽子

潮騒や遠浅の海かげろへり

白梅の日に透き夜は月に透き

立雛の寄添ふ月日ありにけり

如月や言ひ澱むこと胸にあり

春疾風にはかに変はる海の色

○ 松山三千江

釣人も川面も春の光かな

東風吹くや船旅に出る話など

円空仏の荒き鑿あとあたたかし

木喰仏につと笑まふや蝶生るる

東京駅の構内ツアー燕の子

○ 赤羽陽子

梅咲いて明けゆく空に月残る

春障子開けて花の香招じけり

芽柳の風に吹かるる街の午後

春昼や電池の切れし腕時計

ちつげけな悩みの数や春の雪

○ 加藤千春

裏山になほ日のありて梅香る

気負ひなき夫を偲ぶや露のたう

露のたう人の仕合せそれぞれに

遍路宿素生問はざる一会あり

リハピリの発声練習山笑ふ

当月集

安立 公彦選



○ 後藤眞由美

魚氷にのぼる日だまりの岸辺かな

山峡の空わたくしす春の鷹

春朧かすかに開く記憶の扉

余寒なほ紅茶におとすブランドー

義仲忌の水面に殖ゆる星うるむ

○ 川崎真樹子

鳩歩む春の目盛を読むやうに

春の橋日当たりながら人を待つ

少年の爪を噛むくせ風信子

雛納む星すれ違ふ音させて

容赦なく子は育ちをり卒業す

○ 吉村さよ子

小さな虫叩きてわびし春の暮

春の灯や素直に言ひし「ありがとう」

こともなげに溜まる切抜き二月尻

まんさくや二日つづきの雨の窓

はやとるる玄関灯や沈丁花

○ 赤岡茂子

雪霏々とスカイツリーを直隠す

臘梅の香り乗りくる花信風

一転の余寒や猿の押しくらべ

川沿ひの真上好みの千寿葱

夕映の枯木さやかに水鏡

○ 小淵二美江

雪降ると遺影に語る七七忌

春の灯や亡夫の友へ書きたより

喪の家に季節移らふ桜草

またたきて春日にうるむ鴉の目

水天宮囲む林や囀れる

春燈の句

安立 公彦選

御社の神鈴の音冴返る

肘をつき眠る羅漢や木の芽風

草青む戦災碑ある川の土手

鴨引きし川面に街の灯影かな

流し雛袖ふれ合ふも波の上

春潮のただひたひたと祈りの白

強面の漢の好きな桜餅

蛇出でて廊下の奥に目を凝らす

春来ると旅のプランを並べをり

松の根の地上にうねり春日浴ぶ

母と子ののりたる木馬梅咲けり

春しぐれ窓の内なる顔並ぶ

道に出て手心もなき雪解水

降続く雪にも負けぬ野の仏

東京 石原 節子

神奈川 石田 康明

神奈川 松田 千枝

京都 曾根 京子

物音の絶ゆる静寂やぼたん雪

雑念の薄れゆくなり雪解光

鎌倉や胸突き八丁雪柳

白梅やふと目でさがす師の姿

白梅の淡路枝垂の名もゆかし

泰然自若池に数多の蝌蚪の紐

教会のステンドグラス風光る

遍路宿灯して畳む輪袈裟かな

空白を埋むるが如く青き踏む

葛菓子に灯るひひなの雨となり

障子開け雛にも見せう春の雪

欠席と決めしより春の鬱始まる

佐保姫の目覚め待ちをる山も野も

利休忌や家紋を替ふる江戸小紋

神奈川 溝越 教子

千葉 鶴岡 紀代

千葉 渡辺 容子



余言

安立公彦

行く雁や告げざる思ひ重く抱き

片桐てい女

彼岸の頃、北方に帰る渡り鳥の景は、古来詩歌に多く詠まれて来た。中でも「帰雁」の語は、「鳥雲に」とともにことにあわれを誘う言葉である。

掲出句に見る「告げざる思ひ」は、生ある者等しく抱く思いだ。しかし作者にとつては、そのことがいつ迄も心に重く残っているのである。夕空に一連の棹をなして帰る雁、それを仰ぐ作者の姿が見えるようだ。心的過程を、「行く雁」という情緒をもつて表現したみごとな作品である。

木の芽雨本意のほどを問はれけり

松橋 利雄

「木の芽雨」が適切だ。木の芽の芽立ち時の雨は。もとより春雨だが、木の芽雨にはまた別種のおもむきがある。

対話の相手から、問題になっている内容について、突っ込んだ申し入れがあった。相手は作者の本意が聞きたいの

だ。しかし作者はそのことをあらわに話したくない。複雑な思いの絡む内容である。心理描写の句といふべきか。人情の機微をついた作品である。

畳屋の八十路現役針供養

小林のり人

同時発表句に、〈指ほどの畳待針まつりけり〉がある。作者は「畳屋」さん。しかも「八十路現役」の畳屋さんである。折からの針供養に、祀る針は指ほどもあるという。こういふ、暮らしに直結した句を見るのは嬉しい。

手許の「春燈集」を開くと、〈畳替良寛像へ布かけて〉という作者の句があった。安住先生の余言で見たような記憶がある。最近住宅の様式も変わり、和風の家でも畳は少ない。しかし畳にはこの国の伝統が息衝いているのだ。

死は再会と思はば寧し亀の鳴く

鷹崎由未子

「死」、重い言葉だ。「再会」も空白の時間を考えると、希望のみでは考えられないものを持つ。この句、「死は再会」と、「思はば寧し」という言葉を、「と」で結ぶ。この「と」によって、重いテーマが安らぎに変わっている。俳句のような限られた言葉の内容を、如何に表現するかということは、定型の飽くなき探究あつてこそ、初めて可能

となるものであると言えよう。

春立つと背筋正して風に佇つ

小張 昭一

「春立つ」、いい言葉だ。但し春立つ二月四日の頃は、厳しい寒気の中にある。今年の立春の日の当地の気温は、一度九分まで下がった。しかし立春という言葉には、ひと時寒気を忘れさせる前向きな思いがある。

この句、「背筋正して」がいい、「風に佇つ」がいい。作者の、青年に還つたような姿勢が浮かぶ。こういう句を見ると、俳句を作る悦びが湧いてくる。

文庫本閉ちて炭継ぐ寒さかな

佐々木良玄

私小説の世界に身を置くような句だ。十七文字で良く文章の一節を物語っている。その静謐さは、へ更くる夜や炭もて炭をくたく音 大島蓼太の句に通うものを持つている。作者は僧籍の人と聞く。

夜更けの一室。日常の努めを離れ読書に耽る姿が伺える。暖をとるのは火鉢。同時発表の句に、へ臙夜や死者も生者も蠟の膚」という句がある。達観した姿を見るようだ。

二胡の音の水の都や猫柳（蘇州）

久米 憲子

「二胡」を辞書で引くと、清朝の中頃より起こった中国の弓奏弦楽器、とある。そういう字句より、二胡という言葉のひびきには、一抹の郷愁を呼ぶものがある。評者の思

い出を挟むのは如何なものかと思うが、先の大戦で戦死した兄が、一とき蘇州に居たことがあり、現地の絵葉書を送つて来たことがあった。湖に浮かぶ小舟に人が乗っていた。間もなく蘇州夜曲の唄が私たち地方の街にも流れた。

掲出の句、「水の都」が蘇州にふさわしい。蘇州を流れる水は太湖にそそぐ。「水の蘇州の花散る春を…」という歌詞を思い出す。ノスタルジーを誘う句だ。

造成の杭打ち込まれ山笑ふ

瀬戸 峰子

山の多いわが国には、山崩れによる災害も多い。先の広島山崩れは悲惨だった。この句、その山崩れを防ぐために杭を打つという。風雅は現実にかかず。この「山笑ふ」は正に苦笑である。現実を詠むことは厳しい。

佐保姫の目ざめ誘ふ水の音

小山 繁子

「佐保姫」は春の造化を司る女神。この句、「目ざめ誘ふ」がいい。古語となりつつある「姫」を活かし、水温む春水が、その姫の目覚めを誘うという表現はみごとだ。

歳時記には、佐保姫は文化五年の書に、「かたちあるにあらず、天地の色をおりなすを仮に名づけたるにある」と記す、と在る。季語のふところは深い。同化あるのみ。